

第1回芸術文化振興ビジョン検討委員会 議事要旨

令和2年8月28日(金)10:00~12:00
兵庫県民会館10階「福の間」

1 開会

2 開会挨拶

藤原知事公室長が挨拶を行い、芸術文化振興ビジョン改定に向けた審議を依頼した。

3 委員紹介

4 資料確認・会議の公開にかかる報告

資料の確認と、会議の公開について、事務局から説明を行った。

5 委員長選出

委員の互選により、佐竹隆幸委員（関西学院大学専門職大学院経営戦略経営科長）が委員長に選出された。副委員長として、加藤隆久委員（神戸文化芸術会議議長）、山本亮三委員（兵庫県芸術文化協会理事長）が選出された。その後、佐竹委員長が、委員長就任にあたり挨拶を行った。

6 資料説明

協議に先立ち、芸術文化振興ビジョン改定の概要、背景、これまでの取組と課題等について、資料に基づき事務局が説明を行った。

7 協議

- 兵庫県は財政的に厳しい状況にあるが、芸術文化に関しては、ソフトもハード整備も頑張っている。この流れは、「芸術文化立県ひょうご」ということから、継続してほしい。

しかし、一部の人たちが頑張っている活動が、多くの人達に届いていない現状がある。県民と一緒に、「芸術文化を盛り上げよう」という、そういう呼びかけがもっとあっても良い。新たなビジョンには、県民への情報発信を取り入れる必要がある。

- 兵庫県内の芸術文化団体はどこも、高齢化の問題に直面している。また、最近の若い人は、団体に属さない傾向にあるため、若い人が入ってこない。このような状況のなか団体を継続させるためには、アウトリーチ活動が重要になってくる。

しかし、コロナの影響で、今年は学校訪問が難しい。また、障害者学級への指導を行うことが出来る人材がなかなかいない。県と連携しながら、アウトリーチ活動をどんどんやっていきたい。
- 市町中心の六古窯サミットは既にあるが、産地の中にある工芸士会が今後協力して行こうという初の会合を開きたい。
- 全国の公共ホールにおいて、アーティストをとりまとめ、プロデュースする人材の高齢化が進み、アーティストの得意分野とホールの間を取り持つ人が減ってきている。こうしたアーティストの活動能力を活かす整備に対する行政側の支援が若干足りない。

以前、芸術文化協会では「アートマネジメント講座」をやっていた。アートマネジメントに対する県の指導が必要である。新たなビジョンには、人材育成にアートマネジメントの面も含めてほしい。
- プロデュース力をもつ芸術文化センターの考え方を、もっと地域に伝えてほしい。県には、大小多くのホールがあるが、そういったホールが育っていくようなプロデュースの仕方を、県が講座を行うなどして広めていただきたい。
- 芸術文化センターはマネジメントに特徴があり、優れたマネジメントによって大きな成果をあげた全国的にみても先進的な施設である。例えば、劇場に足を運ばない人にも大きな変化を与えているという点が挙げられる。市民にとって、将来に残したい町の魅力となっており、地域には多くの支援者がいる。
- 兵庫県は、地域差はあるが、文化に対して興味がある人が多い。これは、阪神・淡路大震災のなかで、芸術文化が果たした役割に人々が共感したからではないか。こういった県民の方々の意識をもとに、コロナ禍の後、どのように芸術文化を復活させていくかが重要になってくる。
- ICTの活用については、コロナ対策もあるのでぜひ積極的に進めてほしい。しかし、リアルで時間と空間を共有するという芸術文化の本質的な部分と、ICT活用により潜在的なマーケットとして掘り起こすことが可能かどうかということとは、上手くバランスをとっていく必要がある。
- 障害者が芸術に取り組む際に最も大きな障害は、地域性だけではなく、経済面ということも忘れてはいけない。その点、アウトリーチのような考え方は良い。

だが、アウトリーチを進めることは、コロナ禍の中で課題も多い。

- 観光や産業との連携については、行政のあり方に配慮する必要がある。
- プラットフォームの整備は非常に重要である。県・市町の行政がまたがる分野を、プラットフォームで上手く回していく必要がある。
- コロナによって全てが変革を余儀なくされている。こういう時だからこそ芸術文化の力は必要ということを改めて感じている。これをきっかけとして、大きなステップアップができれば良い。

また、阪神・淡路大震災の後、芸術の力が見直されるきっかけとなったというのは、本当にその通りである。その後、東日本大震災があり、今回のコロナがありということで、社会に関わっていきいたいという作家たちの思いや、社会的関与芸術というのが盛んになってきている。今後は、社会との連携が重要になってくるだろう。
- 兵庫県は広く、自然も豊かで、芸術文化の歴史もある。栄えている阪神だけでなく、播州、丹波など、それぞれの地域が、大きな可能性を有している。こうした地域の文化を、どのように繋げていくかが今後の課題である。互いに協力しながらも、目に見える成果が実感できるような仕組みをつくっていく必要がある。
- 兵庫県は、摂津・播磨・丹波・但馬・淡路の五国からなり、それぞれに多彩で特色ある文化がある。また、文化だけでなく、観光や産業の面においても特色がある。そういうものの連携を深めていくことが重要である。具体的には、文化や観光、産業といった異なる分野の人たちが一堂に会し、討論し、芸術文化について発表する、そういう場をつくってほしい。
- 兵庫県には著名な芸術家が多く、多彩な芸術文化もあるが、高齢者と若い人の交流が欠けているという問題がある。今後は、若い人と高齢者の世代間交流を促進する仕掛けを作っていく必要がある。
- コロナ禍から生まれた新しい創造・発信の手法は、今後も進めてほしい。
- 県内で若手アーティストが活躍できるイベントを開催し、地元で若手を育てていくことは重要である。イベントに参加することで、若手の芸術家達も兵庫という場所に愛着がわき、県民にとっては若手の芸術家を応援するきっかけとなる。若手の芸術家を地元で支え、そうして育った芸術家たちが自分たちの力を地元で発揮・還元していく。そういった循環を、さらに強めていくことを考えて、ビジョンを改定していく必要がある。

- 兵庫県は、高校での音楽教育の充実や、芸術文化センターのスーパーキッズオーケストラの存在によって、若手の音楽家がどんどん育つ流れが出来ている。そういった流れが、音楽に限らず、色んな分野で見られるようになってほしい。
- 例年開催していた様々なイベントが、今年は残念ながらできなくなった。また、長期にわたってのホールの休館や美術事業の中止、厳しい入場制限をしながらの開催など、本意な状況に陥っている。本来は、こういう時こそ、芸術の力やその魅力をお伝えしていくことが必要であるのに、それができない。IT 技術を使つての発信も必要だが、生のものをどういう形で伝えるかも、今後は考えていく必要がある。安全と芸術の振興をどのように両立させるかが問われている。それができてこそ、芸術文化の振興、存在感というのが発揮できるのではないか。
- 一般に「政治・経済・社会・文化」と言われるが、文化が最後に言われるのは、根本的なものだからである。それほど、文化というのは人々の大事なものであり、これまで兵庫県が芸術文化に力を入れてきたことは評価できる。

また、県内には多くの著名な芸術家があり、来年4月には専門職大学が開学されるなど、他府県と比較しても頑張っている。さらに、県庁の建て替えによって、県庁周辺が新たな芸術文化の拠点となりうる可能性もある。
- 文化庁は、日本遺産が認定されるようになってから、保存から活用に舵を切った。しかし、全ての人にとって、芸術や文化が興味の対象となっているのかというと、そうではないというところから出発しなければいけない。地域の歴史文化だからといって自身の地域のアイデンティティと観光資源を同一に考えることは危険である。
- 芸術や文化を観光と結びつけるには、芸術や文化の側から、観光に接近するという態度をとる必要がある。従来から芸術や文化に親しんでいる方からすると、高い成熟度の芸術や文化でも観光のコンテンツとなり得るが、大勢の皆さん方からすると、そうではない可能性がある。

芸術や文化は敷居が高いという人にとって分かりやすい環境とは何かを、徹底的に議論する必要がある。
- 地域の文化を資源にするためには、例えば兵庫5国の独自文化を分かりやすく示すコア施設が必要だ。コア施設から派生した拠点施設が市町にあることによって、より分かりやすくなるだろう。

芸術文化側から、見やすさ、わかりやすさを伝えることができれば、より多くの方たちが芸術文化に接することができるようになるのではないか。

- 見せ方を変えるということにもっと積極的にならないといけない。瀬戸内国際芸術祭は、現代芸術が設置されたことで景色が変わり現代芸術に分かりやすさを生み出した。表現者の側から、鑑賞者である観光客に対し、接近をしたことの一例である。見せ方に対して、もっと議論が必要だ。
- 受け手側である消費者を育てることも重要である。観光は、あくまで原初の感動しか与えることはできない。その原初の感動から、より成熟度の高い芸術や文化に関心を持つ観光客を作るためには、芸術・文化に接する機会を早い段階で作り上げていくこととセットにしないといけない。
- 芸術文化の定義とはなんなのか。「芸術・文化」としたほうが、観光側や多くの県民に向けて分かりやすいのではないか。
- 子ども達へ伝統音楽を普及するために学校にお願いをしているが、授業の枠等の理由でなかなかできない。なんとか放課後に時間をとれても、今の子どもたちは塾などで忙しく、放課後に邦楽に時間をかける親がいないというのが現状である。
一方で、伝統音楽は簡単に身につくものではなく、身につけるとなると学校に取り入れるしかない。兵庫県にも、伝統音楽専門の学校を作ってはどうか。
- コロナ禍で、屋外で演奏する機会が増えた。屋外の劇場があっても良い。
- 2018年には、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」ができ、それに合わせてできた「文化芸術推進基本計画－文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくる－（第1期）」のなかには、障害者との共生あるいは包摂ということが、目標・戦略として取り上げられた。これは、ここ5年の大きな変化である。
- 障害者芸術が注目された1990年代半ばは、兵庫県は全国的に先進県だった。しかし、その後、兵庫県は他府県に比べやや遅れをとっている。文化庁では、「障害者による文化芸術活動推進事業」という事業を進めているが、兵庫県は、応募と採択、どちらをとってもやや低調である。
- 特別な才能のもつスターのような障害者を輩出するということではなく、誰もが当たり前、やりたいと思うことが出来るようになってほしい。具体的には、健常者が普通にできる習い事を、障害者も普通にアクセスできる社会を実現したい。パラアスリートをコンテンツ化して消費するような風潮もあるが、そうではなく本当の意味で当事者に寄り添うことが、共生であり包摂である。

- 文化芸術の関係者の意識改革が重要である。障害者福祉の関係者は既に、障害者芸術の法律について詳しく知っている人は多い。一方で、芸術文化関係者にはそういったことを意識している人は少ない。具体的には、学芸員とかホールの関係者の意識改革を進めていってほしい。こうしたことは、障害者だけでなく、マイノリティや子育て世代にとっても望ましいことである。そのことをビジョンにとりいれてほしい。
- 社会包摂といった言葉を項目化してほしい。項目とすることで、県が頑張っていくことがより可視化できるようになる。
- 阪神・淡路大震災において文化財をマネジメントする人がいないことがわかり、その後、人材育成に力が入った。県内では、ヘリテージマネージャーが、これまで500人以上育ってきている。これは、当初こそ行政の主導で動いていたが、現在は民間の力で、民間人材を育成している。現在もこうした動きは続いており、全国に拡大している。
- 文化財保護法の改正によって、文化財保存・活用地域計画ができ、資産を将来に活かす法的な組み立てもできた。地域の歴史遺産を示す文化財のリストづくりも進んでいる。
- 国宝や重要文化財など、千年単位で考えないといけないものを変えるのは難しい。しかし、その周囲にあるバラエティ豊かなものは、活用を前提にしない限り継承することができないだろう。それらをコーディネートができる核となる施設、例えばヘリテージセンターを、文化圏ごとに拠点として整備できないか。
- コロナで観光分野はストップしたが、「GoTo トラベルキャンペーン」によって、一軒貸しをしている宿泊施設は、すぐに復活したと聞いた。これは、コロナ以降の人の動きに関するヒントとなる。コロナ以降、ICTの活用は重要となるが、ゆったりと安心できる場所もカウンターカルチャーとして必要になってくるだろう。
- 芸術文化の場を育て広げるには、学校教育の役割が重要だということを改めて感じている。しかしながら、学校現場は、文科省から、授業数の確保と教員の働き方改革を要求されている。そうしたなかで、各校長は、行事の精選を余儀なくされている。そのため、ほとんどの学校で芸術文化に触れられる機会は減ってきている。

- 「わくわくオーケストラ教室」は素晴らしい事業だが、現場では大きな課題がある。それは、遠距離在住の中学生が西宮まで行かなければいけないことである。それも貴重な経験と考えることもできるが、授業の確保という点から考えると厳しい。例えば、豊岡にも素晴らしいホールは沢山ある。県内の他の地域にもそういった音楽鑑賞のできるホールがたくさんあるので、そこに来て演奏していただくと、とてもありがたい。
- 学習指導要領が新しくなり、キャリア教育が大きく取り上げられるようになってきた。AIによって今ある仕事は半分なくなると言われているが、芸術文化はおそらく今後も絶対なくなる職業だろう。そういったことも含めて、芸術文化について子ども達に伝える場をつくりたいと思っている。
- 兵庫県は、阪神・淡路大震災以来、芸術文化を心のビタミンとして、力を入れてきて現在までやってきた。しかし、コロナ禍によって、当たり前のことが制限されるようになってしまった。新たなビジョンには、コロナ禍の教訓をしっかりと含めていただきたい。
- コロナ禍によって、多くのアーティストがリモートで配信することとなった。その際に、県の動画配信の補助はありがたかった。

一方、動画作成には、演奏家の自前の知識、技術だけではどうしても限界がある。そのため、今後、世界に向けて発信するには、ICTに関する研修等のシステムを構築してほしい。演奏プラスアルファのものがないと、効果的な発信はなかなか難しい。
- 同じ空間・時間を共有してその場で演奏を聴いていただくのが演奏家にとって一番の願いである。そのためには、安心・安全に演奏を聴けるホールが必要である。今後は、客席数を少し減らすなど、感染症に対応した新たなホール作りを考えてほしい。
- 「芸術文化を“する、見る、ささえる”主体となる県民意識の醸成」というのは良いキャッチフレーズ。兵庫県は「する」という面は非常に良い。若い人たちが芸術に親しんで発表する場はできてきている。問題は「見る」である。鑑賞者が高齢化し、なかなか若い世代の方に来てもらえない。積極的にこちらから出向いて行って、学校現場で公演させていただくことが大事になってくる。若い人たちが音楽に親しむ環境に力を入れていただきたい。

- 兵庫県の文化にはいくつかの強みがある。例えば、芸術文化センターは、全国的に力をいれている施設である。また、専門職大学や龍野アートプロジェクトは、もはや、地域の生き方や暮らし方を変えていく一つの大きなプロデュースとなっている。そういった強みを、これからは全国に伝えていく必要がある。そのためには、県の強みを我々が改めて認識する必要がある。
- コロナの動画配信事業では、優秀な若いアーティストが多数参加した。若手アーティストや先進的・前衛的な分野のアーティストを、どのように応援していくかも考えていく必要がある。
- 龍野や丹波篠山における地域でのイベントも大きな力となろうとしているが、これらのイベントがより飛躍するためのサポートも、今後必要になってくる。
- 兵庫県というのは書道王国でもある。書道分野において、日本中から兵庫県に多くの人を訪れる集客力のある文化である。そういったことを一つの大きな資産とする必要がある。それが文化の価値を高めることにも繋がる。
- 今後、少子高齢化のなかで地域の伝統文化を支える人がいなくなり、消えてしまうことが予想される。これを世の流れとして仕方ないと思えるのか、保存すべきと考えるのかは難しい問題であり、議論すべきことである。同様に、コロナによって祭りもなくなった。祭りがなくなると文化もなくなってしまふ。心しておかないといけない。
- 音楽は生でなくてはならないと思うが、実際には会場への入場は制限され、お年寄りもなかなか来ることが出来ない状況にある。したがって、動画配信と生の鑑賞体験は、並列で行っていかなければいけない。
- ICTに関して、単に流すだけでなく、それが市場で成り立つかということを考えて支援する必要がある。それが行政の役割である。例えば、クラウドファンディングの支援などが挙げられる。
- アーティストと行政とその関係者で話ができるというのが兵庫県の強みである。様々な事業を展開する上で、直接話ができる関係が大きな力にもなる。それがベースとなり、プラットフォームの一つの大きな機能となるだろう。

8 諸連絡

議事録の公開と次回の日程調整について、事務局から説明を行った。

9 閉会挨拶

藤原知事公室長が、閉会挨拶を行い、今後のさらなる審議を依頼した。

10 閉会